アクバル箴言集(一)

近藤　治

ムガル朝第三代皇帝アクバルの政治顧問として重用されたシャイフ・アブルファズル（一五五一―一六〇二）の著した『アクバル会典』は、一六世紀末に成ったアクバル時代の制度集成として貴重な史料文献である。この書は五部(daftar)から構成されており、最後の第五部は「皇帝箴言集と結語および著者に関する略説」と題されて、そこに含蓄に富むアクバルのことばが多く収録されている。

これらのことばはアクバル自らが書き留めたものではない。彼のことばをアブルファズルが筆記したものである。従って、その際にアブルファズル一流の技巧と修辞をこらした表現になっている場合が多いことに留意しなくてはならない。事実、これらの文章は実に難解なものが多く、アクバルが口頭で述べたときの表現をそのまま伝えているとは到底思えないものが少なくない。しかし、これらの文章がすべてアクバルの意図したところを伝えていることもまた事実である。その意味で『アクバル会典』第五部中のアクバルのことばを集録したこの部分は、近世インドの絶対君主として君臨したアクバルの箴言集であり、この皇帝の思想や公的、私的側面を伝える歴史的証言の記録といってよい。

小稿はこの箴言集全体を逐次翻訳紹介していこうとするものである。翻訳の底本にはベンガル・アジア協会から刊行されたブロックマン校訂のペルシア語刊本 Āīn-i Akbarī by Abū'l-Fazl-i 'Allāmī, ed. by H. Bloehmann, Vol. II, Bibliotheca Indica New Series, No. 387, Calcutta, 1877 を使用し、同時に大英図書館所蔵の良質の写本 British Museum Add. 7652 と常時対照して疑問点を質した。またジャレットの英訳本 Ain-i-Akbari of Abul Fazl-i-Allami, Vol. III, tr. by H. S. Jarrett, revised by Jadunath Sarkar, Bibliotheca Indica Work No. 270, Calcutta, 1948 を適宜参照した。

アクバルの箴言はすべて「お述べになっていた」(mī-farmūdand) の語で導入されているが、翻訳に際しては

省略した。第五部冒頭には「〔これまで〕欽定諸制度の概略について自らの感謝の意を込めて、かつまた余人への贈物として書いたので、〔次に〕皇帝の言行を遠近に知らしめるため、形と心に関するその聖なることばのいくつかを書き留めておくのが適切であろう」というアブルファズルの一文があり、このあとにすぐアクバルの箴言が続く。翻訳文にはそれぞれに通し番号を付した。頁数は底本のそれを示し、〔 〕内は翻訳者が加えた語であることを示す。

《二二七頁》

（一）被造物と造物主にはことばでは表わせない結びつきがある。

（二）万物にはそれぞれ固有の特性がある。そして心は懸念から解放されることがなく、他人との友愛を求める。悲しみと喜びはそこから生ずる。何人も輝ける幸運にありながら、あらゆることがらに心を執着させない者こそ永遠なる至高の愛を見出すことができる。

《二二八頁》

（三）人間の存在は、〔このこと、即ち前条を〕理解した者は誰でも至高の位置に到達できるということのほかに、何ら特別の意味はない。

（四）何人もそれ〔神〕との聖なる関係をよく知っているものは、それ以外のものとの結びつきを再び持とうとはしない。

（五）インドの女たちは水を川や池や井戸から自分で汲み上げて、いくつもの甕を重ねて頭上にのせ、仲間とおしゃべりしながら軽やかに歩く。彼女たちは上り下りの道を行き交う。心で甕の平衡を念じているので、〔甕は〕壊れることはない。これに比べ男たちは、神との結びつきにおいていかに劣っていることか。

（六）物質的および非物質的なものとの本質的関係がこのように強固であるならば、人間と至高なる神との結びつきを誰が遮ることができようか。

（七）真の求道から偽りの穿鑿にさまようことがある。万物はすべてその反対物との対比で理解されるので、反対物もまた蓋し存在意義がある。

（八）理性は、理性的であることが明らかに神聖なる規範に反するものであることを認めようとしない。しかしある者たちは経典に信をおかず、また言葉を持たぬ聖霊が人間の言葉で語ることを認めない。また他の者たちは解釈において食い違いを持っている。

（九）神の恩寵は万人の上に等しく及ぶ。しかしある者たちは適切な時を失したため、また他の者たちは準備を怠ったため、〔それを〕享受していない。恰もそれは壷作りの仕事がこの謂の正しさを物語っているように。

（一〇）宗教上の新しい慣行を呼びおこす信仰儀礼は、眠れる者どもを覚醒するためのものである。さもなくば神への崇拝は心から発するものであって、体から発するのではないからである。

（一一）信仰の第一の階梯は、試練の時、苦難に対し眉を顰めることなく、それを医師の苦い薬とみなして晴やかな表情で受け入れることである。

（一二）形なきものは夢の中で見ることも、起きている時に見ることもできないが、しかし想像力によって察知できる。まことに想念によって神の姿を見ることは、これと同様の方法によるのである。

（一三）ほとんどの信者は祈願成就の願いをもっているが、信仰心はもっていない。

（一四）黒髪が白髪に変るということから、〔人は〕このような白髪が決して遠い先のことではなくなると、運命の魔力によって〔この色を〕洗い流し、あわよくば心の蒙昧を払い眼力をさらに強めようという欲が深まる。

（一五）人々は神の御意に反して進んだとき、救済の方法はその誤った道から引き返すことであると考えている。賢明なる者は、何人も神の命に反することのできないことを知っている。このような考えから医師たちは病人たちへの薬を調合するのである。

（一六）誰もが至高の神に対して己れの都合のよい尺度でもって名を付けるが、しかし知られることなきものにとって名は何処にあるというのか。

《二二九頁》

（一七）命名は不明瞭さを除くことにあるが、それは聖なる本質において求められるものではない。

（一八）真空の存在は不可能であるということはいうまでもないことである。しかし全能の神は遍く存在する。

（一九）人間に善悪、正邪さまざまあるのは、すべて神の不可思議な力の賜物である。変差は人によって起るのである。

（二〇）悪を悪魔の所為とするのは、〔悪魔を〕至高の神の協同者とするものである。仮に追剥がおるとすれば、その追剥行為は誰の所為なのだろうか。

（二一）悪魔の話は古くから伝えられている。〔だが〕神の御意によってもままならない力が〔一体〕誰にある

というのか。

（二二）神を探求したいという気持が、さる農夫の心に起った。彼の導師は彼が牛に親愛の情を持っていることを知り、彼を墓室に入れてひたすらそれを思念するよう命じた。しばらくしてから導師は農夫を試みに呼び出した。農夫は瞑想に沈んでしまっていたので、自分に〔牛のような〕角が生えていると思い込み、角が生えているので〔出るのに〕邪魔になりますと答えた。導師は農夫を一途な瞑想者と知って、徐々に彼をもとに戻してやった。

（二三）人間が〔動物より〕優れているところは、理性の宝石をもつところにある。〔理性を〕光り輝かすように努力し、その指示するところに背かないことが肝要である。

（二四）人間は自らの理性の随順者である。もし〔理性が〕生来光沢を放てば、〔その人の〕導き手となるし、もし一層高次の精神において〔光沢を〕獲得すれば、その場合もまた導き手となる。

（二五）知性の探究が称賛され、模倣が非難されることは、説明を要するまでもなく明かなことである。もし模倣が価値あったならば、予言者たちは自分たちの先行者たちの追随者となったであろう。

（二六）多くの理性を病む者は、自身の健康に強い確信をもっている。しかし名医たちは〔彼らの〕額の表情から〔病状を〕見立てるのである。

（二七）肉体が変調をきたして病気となるように、精神もまた同様に病気となる。知性は薬を受入れないと衰弱する。

（二八）理性の麻痺には、善人たちの間で使えるようないかなる治療薬もない。

（二九）人物を見抜くことは実に難しいことで、誰にでもできることではない。

（三〇）魂は〔肉体に対する〕優越性をもっているが、〔肉体の〕性質と感応することによってその〔肉体の〕色調を帯び、かの素晴しい輝きは曇ってしまう。

（未完）